

第124回 『視聴者参加番組のパイオニア 「歌のタイトルマッチ」』

昭和35年6月、反安保闘争で国内が騒然とする中、同年7月、視聴者参加型の歌番組『象印 歌のタイトルマッチ』が誕生します。

当時、スポーツ界ではボクシング熱が高まっていて、『ダイヤモンド グローブ』などの中継を毎晩のように楽しめ、おかげでストレスも発散できました。建築家・安藤忠雄がかつてフェザー級のプロボクサーだった10代後半、世界王座獲得前のファイティング原田の練習を目の当たりにしてボクシングから身を引く決意を固めた時期です。

現在の「テレビ朝日」が「日本教育テレビ」として開局した翌年に当たり、局としては初の歌番組でもあり、「タイトルマッチ」という言葉には当時のボクシングブームが反映され、人気便乗を願ったものだったように思います。

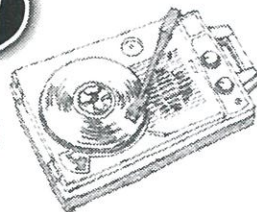
30分の番組はセミファイナルとメインイベントのように「ものまねと歌」の2本立て構成になっていて、タイトルどおり、それぞれのチャン

ピオンに毎週、新規出場の挑戦者が挑むタイトルマッチ形式でした。子供はものまねが好きなので、小学生

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵・松本浦



だった私は前半のものまねのほうを
楽しみに見ていました。

ジャッジ役の審査員には西沢爽、
服部良一、古関裕而、渡久地政信、
淡谷のり子、徳川夢声、安藤鶴夫、
大久保伶ら、作詞家・作曲家・歌手・
作家の大御所が名を連ねていました。

徳川夢声と安藤さんは覚えていませ
んが、NHKの朝ドラ『エール』の
モデル、古関裕而をはじめ、西沢、
服部、渡久地、淡谷の存在はこの番
組で知りました。声帯模写の芸人で
大村崑の師匠だった大久保伶の歯切
れのよい講評も印象に残っています。

伴奏はチャーリー石黒と東京パンチ
ョス、チャーリーが審査に加わるこ
ともあったように記憶しています。

そして、リング・アナウンサーと
レフェリー役を兼ねた司会は、ロイ・
ジェームス。ボクシング界には遠山
甲というダンディー

なレフェリーがいま
したが、長身で眼鏡
の似合うロイさんは
さらにスマートで知
的でした。

終戦の翌年、NH
Kラジオ『のど自慢
素人音楽会』（現在
の『NHKのど自慢』



の前身) から始まった視聴者参加型
の歌番組は、当初、民謡や浪曲など
大衆音楽を幅広く受け入れて老若男
女に親しまれていましたが、審査員
による講評などはありませんでした。

『歌のタイトルマッチ』以前にも企
業同士で争う福助提供『源平芸能合
戦』が現TBSで放送されていまし
たが、『歌のタイトルマッチ』が手
本を示した「一流の音楽関係者によ
る講評」と「案内役の魅力司会」
は、その後の『家族そろって歌合戦』
『オールスター家族対抗歌合戦』な
どの視聴者参加型歌番組に大きな影
響を及ぼした、と私は思っています。

ちなみに「ものまねと歌」、この
組み合わせを素人ではなくスター歌
手によって対決させたものが、この
番組終了直後から始まった『象印
スターものまね大合戦』でした。人

気歌手が登場するた
めスタジオから大き
な会場に舞台を移し、
華やかなものまね番
組に変身、歌謡曲の
楽しみの枠を広げま
す。寄席の声帯模写
が大きく形態を変え
た瞬間でもありまし
た。